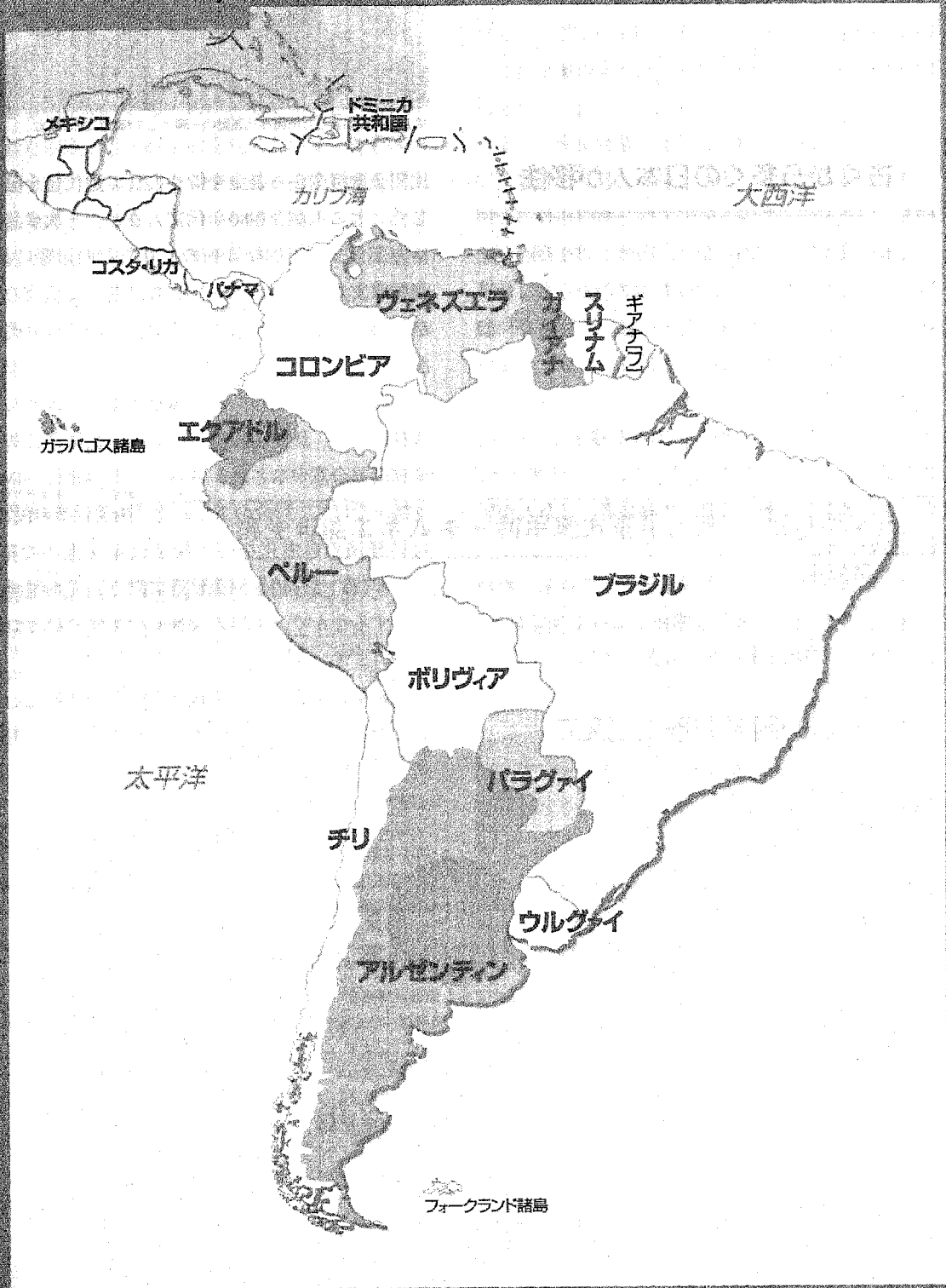


第8章

South America

南米地域



開発の現況



協力隊員の提案した市街美化運動の一環として植樹に取り組む
(パラグアイ)

古くから多くの日本人が移住

南米地域は12カ国からなり、面積は1772万km²、世界の総面積の約13%、人口は約3億1000万人で世界の総人口の約6%を占め、大・中規模国が多く、広大な土地と豊かな天然資源、人的資源に恵まれているのが特徴です。

この地域には、古くから日本人が移住し、現在、ブラジル、ペルー、アルゼンティン、パラグアイ、ボリビアなどに多くの日本人移住者、日系人が居住しています。

1873年にペルーと外交関係を樹立して以来、わが国は、この地域とは密接な関係を保ってきており、要人の往来や日本企業の進出も盛んです。

経済的困難を乗り越えて

1960～70年代に、南米地域の多くの国が先進国や

民間金融機関から資金を借り入れて近代化を図りました。ところが、1980年代に入ると、一次産品の価格の下落や国際的な金利の上昇などの影響により、国際収支が悪化し、インフレも昂進して債務の返済が困難になるなど、これらの国々の経済は危機的状況に陥りました。

このような状況のもと、1993年までにほとんどの債務国では、新債務戦略（ブレディ提案）に基づく債務削減合意がなされ、さらに、世界銀行やIMFの支援を受けて、行政のスリム化、国営企業の民営化、対外経済の自由化などの構造改革を進めた結果、1990年代には経済が回復軌道に乗り、先進国経済が低迷するなかで、世界の成長センターのひとつとなっています。

1990年代に入り、経済統合の動きも活発化してきました。南米における代表的な存在として、南米共同市場（MERCOSUR）があります。

南米地域に対する JICA 援助の基本方針

南米地域には、アルゼンティンやブラジルなどのように、開発が進み、DAC（開発援助委員会）分類の中所得国に位置づけられる国がある一方、ボリビア、パラグアイなどのように、各種の社会指標がいまだに低い国もあります。

これらの国々の多くは、近年、環境の著しい悪化に直面していることから、アマゾンをはじめとする森林の保全、大都市の大気汚染・水質汚染対策など、環境保全分野での協力が、南米諸国に共通する援助重点分野となっています。また、い

ずれの国においても、地域所得格差や富の偏在が顕著であり、貧困層への支援や、地域開発も重要な課題となっています。このほか、ボリビアなど開発の遅れている国に対する援助は、農業開発やインフラ整備、保健衛生の改善などが重点課題となっています。

また、この地域には多数の日本人移住者、日系人がいることから、移住者やその子弟を対象とした研修員受入や、日系社会に裨益する経済・社会インフラ整備などのほか、日系人研究者・技術者の南

米協力への活用を積極的に進めています。

さらに、中南米諸国やアフリカ・ポルトガル語圏諸国に対する協力の拠点として、チリおよびブラジルとはパートナーシップ・プログラムを締結し、南南協力を積極的に支援しています。

最近では、MERCOSURをはじめとする地域経済統合の動きが顕著であることから、これらの支援につながる協力を企画、実施していく予定です。

産業の発展と深刻な国内格差

南米地域には、豊かな天然資源を背景とした第一次産業の盛んな国に加え、ブラジルやアルゼンティンのように工業化の進んだ国もあり、世界銀行の分類による中所得国が多いのが特徴です。しかし、長期にわたる政治的・経済的混乱のために、社会基盤整備が十分に進んでいない国もあります。また、中所得国ではあっても、国内の所得格差から生じる貧困問題は深刻であり、麻薬や環境汚染などの問題も存在しています。このため、近年の経済状況の改善にもかかわらず、依然として経済・社会開発のための援助を必要としている国が多いといえます。

環境悪化と麻薬が新たな課題に

南米地域は、アマゾンの熱帯雨林をはじめとする貴重な生態系の宝庫であり、これらの保全が世界的な注目を集める一方、大都市における環境悪化も深刻化しています。

また、麻薬問題も地球的規模の問題となっています。コロンビア、ペルー、ボリビアなどで麻薬が不法に栽培される背景には、農村や山岳地域の貧困や所得格差があるといわれており、麻薬関連の犯罪、テロ、地下経済の発達などが、南米地域全体の政治、経済、社会の安定を脅かす要因のひとつとなっています。

Front Line

再生可能エネルギー利用地方電化計画…ボリビア

初めて家に電灯がともった喜び

◆エネルギー問題の解決策は

開発途上国が発展する過程において、避けては通れないもののひとつに、エネルギー供給の問題があります。増大するエネルギー需要に対して発電所などのインフラ整備が進まず、また、石油輸入代金の不足、環境破壊、温暖化ガスの発生など、さまざまな問題がからみあい、複雑で深刻な様相を呈しています。

地方村落の電化にあたって、これらの問題をまとめて解決できると期待されているのが、再生可能エネルギーの利用です。太陽光、風力、水力など、自然界で繰り返し生起する現象から得られる再生可能エネルギーを利用した小規模発電設備を、住宅地の近くに設置し、電力を賄おうというものです。

現在ボリビアでは、これらの非在来型エネルギーの利用がどの程度可能かを確認するため、「再生可能エネルギー利用地方電化計画」と題した開発調査を行っています。

◆太陽光発電機を住民に配布

現段階では、太陽光発電プラントのデータを集めることが中心となっていますが、風力、小水力発電のデータ収集もすでに始まっています。

この開発調査の画期的な点は、270基の太陽光パイロットプラントを、実験に参加する住民たちに配布し、装置の効果を確かめることです。

しかし、問題もあります。それは、住民にとってはプラントの維持費が少なくないことです。プラントの設置の際、最初に2万円弱支払い、その後は毎月約540円を管理会社に支払うことになるのですが、これが彼らにとってはかなりの

開発調査



民家に据えられた太陽光パイロットプラント

負担となります。1日あたり18円の管理費が払えないほど、彼らの収入は少ないのです。なかには、バッテリーや太陽光発電パネルを売ってしまうおそれもある人もいますし、また、盗難も心配の種です。

こうした問題点はありますが、住民にとっては初めて家に電灯がともる意味は大きく、中央の情報から疎外されていた彼らが家のなかで聞くラジオの音は進歩の象徴です。

説明会に10km以上の道を歩いて参加する村人たちの姿を見ると、開発調査の苦労も忘れ、この人たちのために少しでも役に立てればという気概がわいてきます。

(JICA ボリビア事務所)

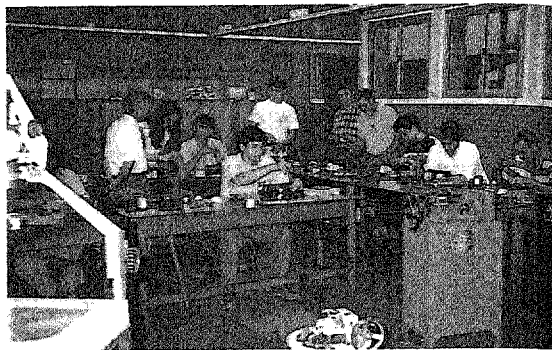
JICA 事業の 重点課題と 取り組み

環境保全に積極的な協力を実施

世界的な注目を集めているアマゾンの熱帯雨林保全に関しては、わが国も森林研究についてのプロジェクト方式技術協力を実施しています。このほかブラジルのサンパウロやチリのサンチャゴなど大都市における大気汚染、水質汚濁、廃棄物処理等の問題、さらには豊富な鉱物資源の採掘と引き換えに発生する鉱山公害の問題に対しても、プロジェクト方式技術協力を中心とした協力を実施しています。

貧困対策・地域格差の是正を図る

ブラジルの東北部やエクアドル、ペルー、ボリビアにまたがるアンデスの山岳地帯などに住む人々は、極端な貧困にあえいでおり、都市部への人口流



「職業能力推進センター」で職業訓練に励む住民たち（パラグアイ）

出や麻薬栽培などの社会問題の原因となっています。わが国は、ボリビアに対しては保健医療分野を最重点として、無償資金協力やプロジェクト方式技術協力を実施しているほか、ブラジル東北部でも母子保健のプロジェクト方式技術協力を実施しています。さらに、都市部に流入した貧困層の支援にも目を向け、ペルーのリマ首都圏では、女性の職業訓練に焦点を当てた開発福祉支援事業を実施中です。

南米地域は、ブラジルのセラードやアルゼンティンのパンパなどを有する、世界の穀倉地帯となっています。このため、わが国もかつては農業生産の増大をめざした協力を実施していましたが、近年では環境に配慮した農業の推進、貧困撲滅へ向けての小規模農民を対象とした協力などに重点を移しています。また、メルコスール加盟国のなかで出遅れているパラグアイに対しては、農業の競争力強化に向けた協力を積極的に実施しています。

工業製品の国際競争力強化が課題

南米地域では、ブラジル、アルゼンティンのように、比較的早い時期から工業化が進んだ国が多いのが特徴ですが、近年の経済自由化や地域経済統合という流れのなかで、工業製品の国際競争力を強化することが課題となっています。わが国は、ブラジル、チリ、コロンビアなどに対して、個別専門家派遣を中心として品質管理・生産性向上分野の協力を実施しているほか、アルゼンティンでは工業分野の省エネルギーに関するプロジェクト方式技術協力も行っています。



ブラジル東北部で実施中の「家族計画・母子保健プロジェクト」主催の「人間的な出生と出産」セミナー

さらに踏み込んだ南南協力支援

南米地域では、比較的経済が発展しているチリ、ブラジル、アルゼンティンなどが独自の南南協力を実施しています。わが国は、これらの国が近隣諸国からの参加者を招へいして行う第三国研修などへの支援を行ってきました。近年ではさらに一歩進んで、日本とこれらの国々が対等なパートナーとなって、共同で中米やアフリカのポルトガル語圏に対して協力をしていこうというパートナーシップ・プログラムが、わが国とチリおよびブラジルとの間で締結されています。

日系社会への支援・日系人の活用

南米地域には、ブラジル、ペルー、アルゼンティン、パラグアイ、ボリビアなどに多くの日本人移住者および日系人が居住しています。彼らの活躍は、各国の発展に大きく貢献しており、現地における日本のイメージ形成にも寄与しています。

このため、わが国がこれらの国に対して協力をを行う際は、日系社会への裨益という点にも配慮しています。さらに、優秀な日系人を第三国専門家などとして、わが国の技術協力に積極的に活用しています。

Front Line

フケネ湖周辺環境改善計画調査… **コロンビア**

開発調査

3つの対策で「沼地」を「湖」に戻す

◆水草が一面を覆う

コロンビアの首都ボゴタから、車でほぼ真北に向かうこと1時間半。ボヤカ県との境に近づくころ、フケネ湖が見えてきます。

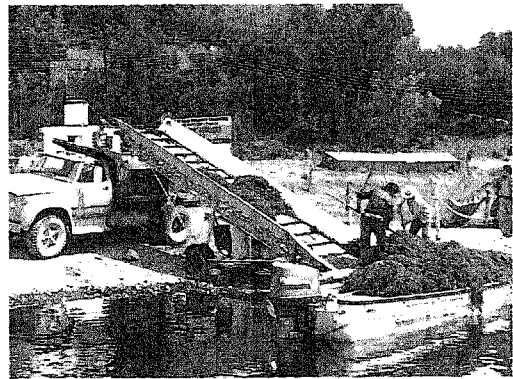
周囲には牧草地帯が広がり、牛や馬がゆったりと草をはんでいる光景を目の当たりにすると、世間で騒がれている治安の悪さなど違う国のことではないかと錯覚してしまうほどです。

そんなのどかな風景に囲まれたこの湖が、長年の土壌浸食により、土砂が流入して湖底が上がる貯水面積の減少が続く、加えて富栄養化が進んでおり、将来は地域の水源としての役割を果たせなくなるのではと懸念されています。

なんとかこれを食い止め、環境の改善を図る方法を探るために現地入りしたJICAの調査団は、まず、富栄養化の影響で、エローディアという水草でびっしりと覆われた湖面に驚かされました。それは、湖というより沼地だったのです。調査団が乗ったボートも、200～300m進むごとに、船外機にからみついた水草を除去しながら調査を続けました。この状態は、湖から支流に入っても同じです。空から湖とその周辺を見ると、やはり水草の繁殖の状況が異常だということが一目でわかりました。

◆草刈り・草魚・しゅんせつ

何度かの調査を経て打ち出された対策は、次の3点でした。まず、機械を使って定期的に水草を刈り取る。次に、草魚というコイの一種を放流し水草を食べさせる。そして最後に、湖口に設けられた水門部をしゅんせつする、というものでした。



湖面を覆う水草を刈り取る作業

刈り取った水草は、乾燥後コンポストという肥料として、付近の花き業者に買い取ってもらうことができます。また、草魚は生態系を乱さないよう、中性化した魚を放流することとなりました。これらの方法は、いずれも調査団が実証試験を重ねて出した結論です。

あわせて、水草の刈り取りとしゅんせつは、カウンターパート機関であるクンディナルカ県自治公社が定期的に行うべきであるという提言を行いました。これは自治公社の予算を踏まえてのことです。

このような内容であればコロンビア側でも十分対応でき、しかも環境改善にも十分有効であると、調査団が自信をもって作り上げた計画案です。(JICA コロンビア事務所)